

平成22年 5月24日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2008～2009  
 課題番号：20720208  
 研究課題名(和文)製作技術から捉えた北部九州産小型青銅器の生産と展開に関する基礎的研究  
 研究課題名(英文)Basic Research on Production and Development of Small Bronze Wares in Northern Kyushu from Manufacture technology.  
 研究代表者  
 田尻 義了(TAJIRI YOSHINORI)  
 九州大学・大学院比較社会文化研究院・学術研究員  
 研究者番号：50457420

## 研究成果の概要(和文)：

弥生時代の青銅器研究では、青銅器の中でも主に共同体祭祀に使用されたと位置付けられる大型の武器形青銅器や銅鐸などの製品を対象として進められており、数多く出土する小型青銅器についてはほとんど注目されてこなかった。しかし、小型青銅器は青銅器文化の一角を占める重要な遺物であり、また大型青銅器と当時の扱われ方が異なることこそが弥生社会の特質の理解に繋がると考えた。そこで、本研究では十分に研究が進行していない小型青銅器に焦点をあて、その資料の基礎的研究を実施した。

## 研究成果の概要(英文)：

It has not been almost paid attention to about the small size bronze wares, because it has considered the large size bronze wares to be used for community religious. Therefore I assigned a focus to small bronze wares.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

## 研究分野：考古学

科研費の分科・細目：人文学・史学・考古学・3105

キーワード：考古学 弥生時代 青銅器 鑄造技術 データベース

## 1. 研究開始当初の背景

青銅器は弥生時代を特徴付ける遺物として取り扱われ、弥生社会研究においても重要

な位置づけが行われている。特に青銅器を用いた研究は、青銅器の出土状況(副葬や埋納)の検討から、当時の社会における階層性や社

会の統合度合を導き出す手法が盛んである(森 1975・下條 1991 ほか)。また、近年は生産関連遺物の研究も盛んになり、青銅器の生産と流通から当時の社会背景を読み取るうとする試みも行われている(春成 1992・田尻 2001 ほか)。

しかしながら、これらの研究は青銅器の中でも主に大型の武器形青銅器や銅鐸などの製品を対象として進められており、数多く出土する小型青銅器については注目されてこなかった。その背景として、これまでの青銅器を用いた研究目的が当時の社会背景を読み解くことであったため、共同体祭祀に使用されたと位置付けられる大型製品に研究対象が偏ってしまったのではないかと考える。しかし、小型青銅器は青銅器文化の一角を占める重要な遺物であり、また大型青銅器と当時の扱われ方が異なることこそが弥生社会の特質の理解に繋がると考える。

さて、そうした小型青銅器であるが、これまでは個別の研究が進められているにすぎない。銅鏡に関しては高倉(1990)や申請者の田尻(2004)が生産と流通に関する議論まで進めている。巴形銅器に関しては杉原(1972)、後藤(1986)、隈(1989)によって分類と編年が行われている。青銅製鋤先に関しては柳田(1985)によって分類編年が進められている。銅釦については個別の事例報告のみで十分な検討は行われていない。銅釧に関しては木下(1982)が分類系譜編年案を提示している。このようにそれぞれ個別に編年研究を中心に検討されてはいるが、製品を横断する製作技術に関する検討が全くなされていない。また、そうした検討を行うための基礎的資料の集成も十分に行われていない。

本研究の学術的背景として北部九州産の青銅器を対象にしたのは、A.資料数が多いこと、B.製品だけでなく製作関連遺物も対象に

含めることができること、C.申請者がこれまでの研究を活かして、さらに研究をステップアップすることができること、D.資料が身近にあることが理由としてあげられる。

A.北部九州産の青銅器のうち本研究で取り扱う小形青銅器とは、1 小形仿製鏡、2 巴形銅器、3 銅釦、4 鋤先、5 銅釧である。これらの資料は鑄型の出土から北部九州で製作されたことが明らかであり、また資料総数は約 400 点になる。資料数としては十分な数である。

B.北部九州における青銅器生産関連遺物の 1 つに鑄型を挙げることができる。これまで鑄型は約 250 点確認されており、申請者はこれまで鑄型を対象とした研究(田尻 2001)を発表し、鑄型から捉えた青銅器生産体制について成果を上げている。したがって、本研究においてもこれまでの研究成果をふまえ、生産に関する議論が可能となる。

C.申請者はこれまで北部九州を主なフィールドとし、東アジア的視点から研究を進めてきた。2007 年 3 月には学位論文『東アジアにおける初期青銅器生産体制に関する考古学的研究』により、博士号学位を取得しており、小形仿製鏡に関する研究(田尻 2004)も学会において新たな知見を示したとして評価されている。したがって、本研究はこれまでの研究に対し幅を広げることとなる。

D.申請者は現在、九州大学埋蔵文化財調査室に奉職しているが、調査室には本研究で対象とする資料を 4 点所蔵している。これらの資料はこれまで十分に学術資料化されておらず、今回の研究の一環として 4 点の資料に関しても十分な資料化を行う。対象資料が身近にある点は、本研究を進める上で極めて有利である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、弥生時代における北部九州産小型青銅器の生産と展開に関する考察を研究課題とし、その研究を行うための製作技術から捉えた基礎的資料の集成と資料化を目的とする。製作技術からの視点という点を加えたのは、これまでの研究動向が主に形態的特徴に重点が置かれていたためである。各資料の分類や編年作業を行うにあたっては、形態的特徴に注目するのは有効な手段である。しかし、本研究ではさらに各製品を横断する製作技術に関する検討を視野に入れた集成研究を行うこととした。具体的には従来の実測図や写真では確認することの出来なかった、a. 鑄型のズレや b. バリの外し方、c. 鑄型に対する彫り込み順序の3項目に着目する。

a. 鑄型のズレとは製品を製作する際に、何らかの作用によって合わせている鑄型がズレてしまい製品の断面を観察することによって、そのズレ具合やズレの方向を復元することが出来る。そうしたズレに一定の規則性を見出すことにより、製作技術の視点から捉えた青銅器生産に関する基礎的データを収集する。

b. バリの外し方とは、鑄型の合わせ目にも湯(溶けた青銅)が回ってしまい、それが凝固して製品の輪郭に沿って鱗状に付着するバリを、どのような手順で外すのかを検討する。製品の側縁を観察することにより、用いた工具の復元や手順についての考察をおこない、それらのデータからパターンを抽出し、製作者の復元まで見通した青銅器生産に関する新たなデータを提供する。

c. 鑄型に対する彫り込み順序に関する検討では、製品に残る彫り込み順序を示す痕跡が

これまでの調査で3点ほど確認できている。それらは小形仿製鏡の文様において認められるが、他の小型青銅器についても観察し、彫り込み順序の復元を行うための基礎データを収集する。

## 3. 研究の方法

対象資料のデータベース作成を実施し、小形仿製鏡・青銅製鋤先・巴形銅器・銅釧を対象とした集成作業を実施した。また、国内資料調査を計12回実施し、対象資料の実見・実測・写真撮影を行った。

### 調査対象先機関

- ・東京国立博物館
- ・大阪歴史博物館
- ・香川県埋蔵文化財センター
- ・高松市教育委員会
- ・さぬき市教育委員会
- ・善通寺市教育委員会
- ・石川県埋蔵文化財センター
- ・石川県立歴史博物館
- ・金沢市埋蔵文化財センター
- ・鳥取県埋蔵文化財センター
- ・熊本市教育委員会
- ・さいたま市教育委員会

## 4. 研究成果

- (1) **九州大学筑紫地区出土巴形銅器鑄型(九州大学埋蔵文化財調査室所蔵)と香川県森広天神遺跡出土巴形銅器(東京国立博物館所蔵)3点が一致した。**本研究課題である北部九州産小型青銅器の生産と展開を示す極めて重要な発見である。また、この一致という成果から、新たに巴形銅器の製作方法を解明する研究も進行し始めている。
- (2) 小形仿製鏡・青銅製鋤先・巴形銅器・銅釧の集成データベースを作成した。
- (3) 山陰地方や北陸地方における青銅器製

作技術との基礎的比較が実施され、北部九州産青銅器との**鋳型材質による対比**が可能となった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計3件)

田尻義了、弥生時代巴形銅器の生産と流通-九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型と香川県森広天神遺跡出土巴形銅器の一致-、考古学雑誌、査読有、第93巻第4号、2009、印刷中

田尻義了、九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型の位置づけ-巴形銅器の分類と製作技法の検討-、九州と東アジアの考古学、査読無、2008、p.p.201-216

田尻義了、二里頭遺跡における青銅器生産体制、中国初期青銅器文化の研究、九州大学出版会、査読無、2008、p.p.57-78

##### [学会発表](計2件)

田尻義了、弥生時代巴形銅器の生産と流通の一例-九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型と香川県森広天神遺跡出土巴形銅器の一致-、日本考古学協会第75回総会、2009年5月31日、早稲田大学

田尻義了、弥生時代巴形銅器の生産と流通、平成20年度九州考古学会総会、2008年11月30日、西南学院大学

##### [図書](計1件)

岩永省三・田尻義了編、奴国の南 - 九大筑紫地区の埋蔵文化財 - 、九州大学総合研究博物館、2009、132頁

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

田尻 義了 (TAJIRI YOSHINORI)  
九州大学・大学院比較社会文化研究院・  
学術研究員  
研究者番号：50457420

##### (2)研究分担者

##### (3)連携研究者